

積算四方山話⑤

1日15分の仕事

野呂 幸一

公益社団法人日本建築積算協会 名誉会長

積算課の人たち

私が配属になった積算課は、約50人、課長が1人、他は全員平社員でほとんどが男性、女性の社員は2、3人いたが、彼女らは集計作業が中心でソロバンの苦手な男性社員の仕事を助けていた。また男性社員は、半数が20代の若手で、40代以上の社員は数名ぐらいしかいなかった。

私のように新入社員として配属された社員は、2、3年経つと現場へ出て行くことになっていた。当時の社員は、現場志向が強く、1、2年経つと1日も早く現場へ行きたいと思うようだった。

一方、現場からも数年経験を積んだ若手が配属されてきたが、現場から配属された人たちは、内勤部門は居づらいのか、再度現場への配属を願っていた。

私のような現場未経験者にとっては、現場経験者から聞く話は興味深く、机上の積算と実際の現場との違いを知り大変勉強になった。また、様々な現場から転勤してくるため、多種多様な現場の実情についても知る事ができた。

現場帰りの先輩と仕事

ある日、終業近くになった頃、大きな声で私の名前を呼び、席に近づいて来る人がいた。

この人は、新入社員として積算課に配属され、2年ぐらい経ってから現場に配属となり、数年経って最近戻ってきた人であった。年齢は30手前で、いつも大きな声を響かせていた。

「俺とお前でこの仕事をやれと言われた」と言って図面を持ってやってきた。

「1週間でやれと言われたが、面白くない。こんな仕事は、1日15分あれば十分だ。午後の4時45分から5時まで仕事をすることにした。お前は、仕上げをやれ、俺は躯体をやる」と言って図面を席の前に広げた。

私は、何が何だか理解できなかったが、とりあえず図面を見ると単純な軽量鉄骨造2階建ての倉庫であった。図面もあっさりしたもので3枚だけであった。「積算は簡単なようですが、いくらなんでも1日15分というのは少ないのではないですか」と言うと「つべこべ言うな。俺の言うとおりにやれ」と言われた。

時間との闘い

さあ大変だ、1週間と言われても当時は日曜日は休みでフルタイムの土曜日を入れても15分×6日で90分しかない。どうしたらいいのか、積算経験の浅い私の実力で果たしてできるのか、不安が先走った。現場帰りの先輩は、私の席の横に陣取り、仕事は明日から始めるが、絶対午後4時45分まで仕事をするなど言う。

翌朝会社に行くと既に先輩は出勤しており、「おう、来たか。茶を飲みに行こう」といって席を立ち外へ出て行った。仕方ないので私もついて行ったが、会社の近くの喫茶店に入ると、この先輩はエネルギーギッシュに勝手に喋りまくった。

競馬の話から始まって、プロ野球の話となり、「やっぱ、今年も阪神は駄目か」などと嘆いていた。そのうち、突然数学の話となり、「この問題は、どう思うか」などと聞いてくる。私が、「さっ

「わかりません」などと答えると「お前はバカだなあ」と言われた。

この先輩は、大学時代、数学研究会に所属していたとのことで、数学にまつわる話題が豊富だった。

昼食後は一旦会社に戻ったが、午後も2時近くになるとまた「茶を飲みに行こう」といって出て行った。今度は、会社から少し離れた別の喫茶店であったが、相変わらず先輩の話は尽きなかった。

午後は、会社の話が多かったが、政治、経済、外国の話などもあり、私は、感心して聞くのみであった。そして4時半頃会社に戻った。

先輩は席に着くと時計を睨んでいて4時45分になると「やれっ」と声を上げた。

私は、まず図面をよく見ないといけないと思い、3枚の図面に目を凝らした。しかし15分は、あっという間に過ぎて、先輩は大きな声で「今日は終わり。やめろ」と言って図面を取り上げた。

いや参った、この調子ではとても間に合わない、何とかしなければと焦った。

暗算で積算

翌日も朝から喫茶店に行き、午後も4時過ぎまで先輩は、前日同様、エネルギーに話をしていた。

私は、ぼーっとして先輩の話を聞いていたが、いつの間にか頭に3枚の図面を思い浮かべていた。単純な設計であったこともあり、だんだん正確に思い出せるようになった。そして仕上げ工事の順番に内訳明細書の項目を洗い出し、その数量を暗算で計算し始めていた。

4時半頃に会社に戻ると、私は5分前ぐらいから臨戦態勢でしっかり削った鉛筆を2本そばに置き、白紙の明細書を前にして号令を待った。「始めろ」という号令を聞くや否や、一気に明細書に喫茶店で思い浮かべていた項目を書き入れ、暗算で計算していた数量を記入した。15分は、あっという間にやってくる。「終わり」という号令で鉛筆を置くが、息を詰めて仕事に集中したためか、全速力で走った後の気分だった。

仕上げ工事は、明細項目が多く、15分で間に合うのか心配であったが、徐々にコツを得ていき、なん

とか期限内に完成させることができた。先輩は、躯体工事であったため、明細書の枚数は少なく、2日前には出来上がっていた。一部は数量欄が空白となっていたが、いつでも記入できるようであった。

喫茶店には、毎日、午前から午後4時半頃までいたが、4日目頃から先輩の話は、今回の積算について語ることが多くなった。建物の特徴や注意すべき積算のポイントなどであったが、最大の関心事は、課長が最後に行うチェック対策についてであった。以前にも紹介したが、この課長が行う最終チェックは、「裁判」と呼ばれ、かなり厳しいものであった。

先輩は、課長が行いそうなチェック方法をいくつも挙げて、どれにでも対応できる数量を見つけたとのことであった。また私には、課長が目をつけそうな項目について、いくつかのアドバイスがあった。

課長の裁判

いよいよ課長の裁判を迎えることになった。先輩と私は、課長の机の前に座り、課長は図面を確かめながら内訳明細書の項目を一つずつチェックしていった。この間、課長から問いただされることは何もなく、無事に終わった。ほっとしていると課長は先輩に「計算書を見せろ」と言った。えっ！ 1日15分の仕事に計算書を作る暇はない。しかし先輩は顔色一つ変えず、横にいる私に「計算書を持って来い」と言うのではないか。私は一瞬頭が真っ白になったが、すぐに立ち上がり自分の席に走った。席に着くと机の引き出しを開け、中から別の工事の計算書を取り出した。そして急いで表紙を破り、新しい紙に今回の工事名を書き、表紙としてホッチキスで留めた。課長席に戻り、この計算書を先輩に渡すと、先輩は黙ってそれをそのまま課長に手渡した。課長は、パラパラと計算書をめくり、「これでいいだろう」と言って裁判は終了した。

課長席を立て自分たちの机に向かった時、先輩は、私に向かって胸の前で小さな輪をつくり、片目をつぶった。もし計算書が偽物とバレたら、どんなに怒られたのか、想像するだけでも恐ろしかった。

当時、計算書は提出せず、各自で保管する決まりであった(ホッ)。